

高坂正顕の大学論（中） —「期待される人間像」を経て—

渡辺恭彦†

はじめに

1961年10月に『大学の理念』を刊行した高坂は、翌11月、東京学芸大学学長に就任する。そして高坂の教育行政上の大きな仕事となったのが、中央教育審議会第19特別委員会の主査就任である。同委員会では「期待される人間像」作成をめぐる審議が行われた。

「期待される人間像」とは、後期中等教育の理念を明らかにするために、今後の日本の国家社会が期待する人間像はいかにあるべきかという文部大臣の諮問に答えたものである⁽¹⁾。

1963年6月24日、「後期中等教育の拡充整備について」の諮問が文部大臣から中央教育審議会に対して出された。その審議のために中央教育審議会第19特別委員会と「後期中等教育のあり方について」を審議する第20特別委員会が設けられた。第19特別委員会の第1回で、森戸辰男会長からの指名により高坂が主査に選ばれた。そして、1966年6月27日に第25回が開催され「期待される人間像」中間草案が審議される。1966年9月5日、9月12日には、第19特別委員会と第20特別委員会の合同委員会で「期待される人間像」報告案が審議された。近年、約3年間におよぶ委員会の審議録を克明に検証する研究が進んでおり、内実が明らかにされつつある⁽²⁾。それにより、高坂が他の委員の意見を優先し、草案に入れることを取り

下げた内容も判明している。一方、中間草案や最終報告が公表された後に、高坂が自身の考えを述べた文章も存在する。そこでは、草案や報告と自身の考えとの間にある異同とその背景が率直に表明されている。つまり、審議により高坂が抑制した考えと強く主張した考えとが選り分けられることとなっているのである。本稿では、第19特別委員会の主査を務めたことで浮き彫りになった高坂の人間観を、高坂自身の言説に即して明らかにすることを試みる。その際、本論文（上）⁽³⁾で明らかになった高坂の思想を適宜参照する。

一．中央教育審議会第19特別委員会の主査として

1964年9月7日、第19特別委員会の第14回で第一次草案が主査草案として審議される⁽⁴⁾。同年12月21日、第17回で中間草案が審議されると、その重要性に鑑みて翌1965年1月11日には国民に公表されることとなった。

その後、中間草案に関する数多くの意見が新聞、雑誌、放送を通じて寄せられた。それを受けて文部省調査局企画課により各種の意見が分類整理され、1965年8月31日には、冊子として刊行されることとなる。事務当局が収集したものだけでも2000件におよび、内容に直接触れた意見、要望等約400件が整理の対象とされた⁽⁵⁾。

†大阪産業大学経済学部准教授

1966年10月31日、「後期中等教育の拡充整備について」の中央教育審議会「答申」が文部省に対して提出される。「答申」には、第一 後期中等教育の理念、第二 後期中等教育のあり方、第三 後期中等教育の拡充整備に伴う諸問題、と続き、さらに「別記」として「期待される人間像」が付けられた。「答申」の分量にして3分の2にあたる「別記」が、「期待される人間像」最終報告である。中間草案の目次と小見出し、最終報告の目次を対照させたものを示しておく（表1）⁽⁶⁾。

「期待される人間像」が主査である高坂の執筆になるものとする従来の見方に対して、山田真由美は、第1回から第13回までの委員会で出された15名の委員の意見発表と第一次草案を比較することにより、第一次草案の大部分が各委員の意見発

表をとりまとめたものであることを克明に示し、「高坂勅語」という揶揄は誤りであったことを明らかにした⁽⁷⁾。

たとえば、第1回の委員会で森戸会長から主査に指名されたことを受けて、高坂はこう挨拶した。「適任だとは決して思っておりませんけれども、皆さん方のいろいろな御意見をとりまとめていく整理役のようなことをさせていただくということをお引き受け申し上げる次第でございます。」⁽⁸⁾

また、高坂自身が「答申」発表後に、主査に選ばれたことを「取りまとめの役を仰せつかった」⁽⁹⁾とあらためて述べていることは、その立場を自覚的に取っていたことの傍証にもなる。主査を引き受けたいきさつについても、中間草案発表に際しての主査談話で次のように述べる。

「期待される人間像」中間草案全文 中央教育審議会 第19特別委員会 主査 高坂正顕 昭和40年1月11日	「期待される人間像」最終報告全文 中央教育審議会第19特別委員会 昭和41年9月19日
目次 序論 当面する日本人の課題 一 人間像の分裂と第一の要請 第一の要請——人間性を高めつつ人間能力を開発せよ—— 二 民族性の忘却と第二の要請 第二の要請——世界に開かれた日本人であれ—— 三 民主主義の未成熟と第三の要請 第三の要請——健全な民主主義を樹立せよ—— 四 日本の象徴 本論 期待される人間像 第一章 個人として 一 自由であれ 二 個性を伸ばせ 三 正しく自己を愛する人となれ 四 頼もしい人となれ 五 建設的な人間であれ 六 幸福な人間であれ 第二章 家庭人として 一 家庭を愛の場とせよ 二 開かれた家庭であれ 三 家庭をいこいの場とせよ 四 家庭を教育の場とせよ 第三章 社会人として 一 仕事に打ち込む人となれ 二 機械を支配する人となれ 三 大衆文化、消費文化におぼれるな 四 社会規範、社会秩序を重んじる人となれ 第四章 日本人として 一 正しく日本を愛する人となれ 二 心豊かな日本人であれ 三 美しい日本人であれ 四 たくましい日本人であれ 五 風格ある日本人となれ	目次 まえがき 第一部 当面する日本人の課題 一 現代文明の特色と第一の要請 二 今日の国際情勢と第二の要請 三 日本のあり方と第三の要請 第二部 日本人に特に期待されるもの 第一章 個人として 一 自由であること 二 個性を伸ばすこと 三 自己をたいせつにすること 四 強い意志をもつこと 五 畏敬の念をもつこと 第二章 家庭人として 一 家庭を愛の場とすること 二 家庭をいこいの場とすること 三 家庭を教育の場とすること 四 開かれた家庭とすること 第三章 社会人として 一 仕事に打ち込むこと 二 社会福祉に寄与すること 三 創造的であること 四 社会規範を重んずること 第四章 国民として 一 正しい愛国心をもつこと 二 象徴に敬愛の念をもつこと 三 すぐれた国民性を伸ばすこと

表1 「期待される人間像」中間草案と最終報告の目次

当時、世間の一部のうわさでは文部省にはすでに五項目ぐらいからなる原案があって、それをもとにして審議するらしいということであった。しかし、わたし自身、なんらそのようなことを直接にきいたこともなく、中教審でそのような話が出たこともない。むしろ天降りのであったり、押しつけであってはならないという意見が強かったと思う。この草案の内容は委員各位の様々な意見を、以上のような観点から掘り下げながら、一応まとめたものである。⁽¹⁰⁾

以下では、高坂がとりまとめる役割を担っていたことを踏まえつつ、中間草案や最終報告に対する高坂の回顧等をもとに、「期待される人間像」の審議を経て、高坂の考えがどのように変遷した

のかを辿る。とくに中間草案以後に高坂が著した文章として、下記を主要な検討対象とする。

- ① 「『期待される人間像』について」（『自治研究』第41巻第4号、良書普及会、1965年4月）
- ② 『私見「期待される人間像」増補版』（筑摩書房、1966年、初版1965年）
- ③ 「『期待される人間像』と哲学」（国立教育会館編集『教養講座シリーズ1』帝国地方行政学会、1966年所収）
- ④ 「『期待される人間像』について」（『文部時報』第1072号、1966年11月）
- ⑤ 座談会「人間形成の目標としての『期待される人間像』について」（『文部時報』第1072号、1966年11月）

① 「『期待される人間像』について」『自治研究』第41巻第4号、1965年4月10日、15-24頁。	② 『私見「期待される人間像」増補版』全265頁。	③ 「『期待される人間像』と哲学」1-81頁。
一 期待される人間像の意味 二 期待される人間像への要請 三 理想の国家像と期待される人間像 四 現代文明について 五 愛国心について	まえがき 第一章 思い出すことなど―東と西― 第二章 科学技術と人間性 第三章 現代人の問題と芸術 第四章 現代思想と人間像の分裂 第五章 快楽・幸福・創造 第六章 人間性と道徳 第七章 家庭・社会・国家 第八章 デモクラシーとヒューマニズム 補遺 私見「期待される人間像」 人間像の探求 附録 期待される人間像（中間草案） 「期待される人間像」について（主査談話） 期待される人間像（最終報告） あとがき	第一講 第一 序論 一 中間草案の意図 二 中間草案と憲法および教育基本法と人間像の問題 第二 古代・中世の理想的人間像 一 プラトンにおける理想的人間像と国家像 二 中世のホモ・パチエンス的人間像 三 近世のホモ・ファールベル的人間像 第三 ヘーゲル没後における哲学の潮流―特にマルクス哲学について― 一 ヘーゲル没後と今日の情勢との相似について 二 マルクスの階級的人間について 三 マルクスの革命的人間 第二講 第四 現代哲学における人間像の分裂 一 ヘーゲル哲学の三つの特色とマルクスの階級的人間 二 キルケゴールの実存的人間 三 ニーチェの超人 四 ドストエフスキーにおける人間像の回復 第五 技術と人間性 一 二つの文化 二 科学・技術についての第一の考え方、楽天主義 三 科学・技術についての第二の考え方、悲観論 四 科学・技術についての第二の考え方、改善主義及びその他の考え方 五 幸福と快楽等について

表2 中間草案公表後に公開された高坂のテキスト

上に挙げたなかでも、高坂自身の主張がまとまった形で出されているのは②である。また③は、第6回教養講座として1965年6月5日、12日に行われた講義を掲載したものであり、内容的に②と大部分重なるところがある。①は、この時期の高坂の主張を表した文章として前二者を補うものである。以上3つの文章は、1965年1月11日の中間草案公開後の高坂の考えを示すものと位置づけられよう。中間草案や最終報告との比較のために、目次を示しておく（表2）。

二. 「日本人」へのこだわりと「向上的愛国心」

1965年1月11日、中間草案が公開された。その後、「特集 人間像」と銘打たれた雑誌『自治研究』が刊行され、森戸会長をはじめ委員会参加者の文章が掲載される。先に挙げた①「『期待される人間像』について」で高坂は、「期待される人間像とは、一体、誰が、誰に対して、期待するのか」という質問に対し、主査を引き受けたときの考えとして、次のように述べた。人間というものは「期待や希望に支えられた存在」であり、自分や友人、親子の間、そして日本の将来に対して何らかの期待を持っている。高坂としては、「日本人が、日本人に対して期待する人間像」⁽¹¹⁾と解釈し、できる限り多くの日本人が期待する人間像をとりまとめてみたいと考えたという。

これは、審議において高坂が強く主張した考えでもある。第17回委員会審議中、森戸と高坂の間で、標題について議論になった。森戸から、標題を「当面する日本人の課題」としたことには高坂の考えがあると思うが、諮問との関連を考えて、日本教育の課題とした方がよいのではないかといった意見が出された⁽¹²⁾。それに対して高坂は、当面する日本教育の課題は第20特別委員会で扱うべきで、やはり「日本人」を出した方がよいのではないかと応じた⁽¹³⁾。

「日本人」という文言は、中間草案第四章「日本人として」の文章中で全面的に使われている。

たとえば、第四章の中の「四 たくましい日本人であれ」に、次の文章がある。

そのことは〔引用者による註記：西と東、北と南、先進国と後進国のかけ橋となること〕もとより日本の独善であってはならない。狭あいな国粋主義はかえって日本を誤らせる。しかし自国を忘れた国際主義は故国のない根なし草である。真の国際主義、世界主義は、自国の使命を感じ、国家を通じて達成されるものであることが忘れられてはならない。世界に恥じることのない日本であることによって、日本は世界のよい一員となることができるのである。われわれはこのような意味において世界的日本人でなければならないのである。⁽¹⁴⁾

たんに世界へと開かれるのではなく、まずは自国に根を下ろすことを使命と感じ、そこから世界へと目を向けることこそ真の国際主義、世界主義であるという主張は、高坂が『大学の理念』（1961）で構想した国際的大学の論理展開と重なるところがある。同書で高坂はこう述べている。

自国の文化の独自の使命を見出し、創造しつつ、世界文化に寄与する。そしてその一員であるという意味である。コスモポリタンは国家を否定する。しかしインターナショナルの立場は、国家を否定しない。遠い将来は知らぬ。しかし今日はまだ国家が文化創造の源泉たる責任を負わされている。大学こそ国際間の憎みと誤解を去り、愛と理解の場たるべきであろう。大学はかかる人間をこそ形成すべきである。この点からみて私は、今後のあるべき大学の理念は国際的大学であるべきだと考えるので

ある。⁽¹⁵⁾

ともに「自国」、「使命」といった言葉を使った文章で、国家に意義を認めている点も同一の主張として指摘できる。もっとも、文言の類似のみで高坂の大学論と中間草案を関連付けることはできない。実際、高坂が第一次草案や中間草案を発表する前の第13回委員会では、森戸が、新しい日本を作る際には民族、国家、文化と伝統に対する関心が重要であることをソ連を例に挙げて主張している⁽¹⁶⁾。自国の文化や国家を重く見るのは、高坂のみではない。

高坂が日本人という文言にこだわった理由については、②『私見「期待される人間像」増補版』の「第一章思い出することなど一東と西一」で説明されている。そこで高坂は前年にハワイで開かれた東西哲学会議での議論を紹介する。会議中、中国人は孔子や儒教の問題に言及し、インドの学者は仏教と釈尊の教説に言及した。ヨーロッパの学者は、否定するにせよ、肯定するにせよ、キリスト教に言及する。現在の日本の哲学の状態について問われた際、高坂はマルクス主義、実存主義、プラグマティズム、分析哲学がそれぞれ一部で流行しており研究されているということを答えるにとどまった。日本の哲学自体について答えられなかったことに高坂は寂しさを覚え、外国の多くの学者が日本の思想はあるが哲学はないという見解を持っていることも実感したという。公開公演の席で鈴木大拙は、「哲学」という言葉は明治維新の頃から日本に現われたものであり、それ以前は宗教と哲学の区別がないことに日本の思想の特徴があるという考えを述べた。哲学が何らかの形で人間像を描くものであるとするならば、日本では「哲学的に人間像の探究が深く試みられたということは乏しい」⁽¹⁷⁾と言わざるをえないことに高坂は寂しさを覚えたという。一方で高坂は、日本における人間像は今後考察される余地があることに

期待を寄せこう述べた。「日本には、キリストも、釈尊も、孔子もないということに対して自らを慰めたのである。日本はそのような意味で、将来にむしろ多くを期待すべき国である。しかしそれにしても、その期待の一つの地盤になる人間像というようなものについての考察はかなりに貧困である、ということは否めない。」⁽¹⁸⁾

その後、高坂は明治以降の近代化の問題を取り上げ、中国の文化使節が日本を訪れた際のエピソードを例に出す。使節の首班である郭沫若のあいさつは、中国が唐の時代にインドから仏教と仏教文化を学び、次に日本から学びたいというものであった。「明治維新以後の日本の近代化の過程というものは、中国に対して大きな刺激にもなり、そこからまたわれわれは、事実、多くを学んだのである。〔中略〕われわれは第二次世界大戦後の日本の復興のめざましい姿を見て、そこからも多くを学びたいと思う」⁽¹⁹⁾ 中国と日本の不幸な関係についてはあらためて考えなければならないが、郭の言葉はたんなるお世辞や偽りでないと高坂は受け取った。東西哲学会議と中国文化使節のエピソードを、日本には哲学はなかったが、「近代の世界歴史の上において、日本が世界の近代化にとって重要な役割を演じたということも、われわれは無視しないほうがよい。」と高坂はまとめている。高坂の「日本人」へのこだわりは、日本における哲学の不在と明治以降の近代化を視野に入れたうえで表されたものだったのである。

高坂自身の国家観については、中間草案後に発表した②所収の「補遺 私見「期待される人間像」」が参考になる。高坂によれば、現代世界では全体主義的な国家群と自由主義的な国家群とが対立しており、日本は自由主義的な国家群に属している。さりとて、全体主義的な国家を敵と認めるべきではなく、委員会でも日本を東と西、北と南のかけ橋とみる考え方は共有されていたという。高坂は「かけ橋」を「中立主義」と言い換え、平和主義

の立場から取るべき考え方だという見解を示している⁽²⁰⁾。

さらに、過去の日本の意義をすべて否定しようとする動きが戦後の日本において見られたことを高坂は批判する。狭い国粋主義の危険性を指摘しつつも、新しい国家理想を実現するには、過去の日本や日本人の中にある要素を掘り起こしていくべきだという。この主張は、『来るべき時代のために』（1952）における高坂の考えと重なり合うところがある。本論文（上）で論じたように、偏狭な排外主義や国粋主義、非合理主義を警戒しつつ、戦時中の日本の知識人の言動から生かすべきところを汲み取り、建設的に反省すべきだと高坂は考えていた。高坂の国家観は、十年ほどの間、持続してきたといえよう。

高坂が「日本人」にこだわったことと関連して指摘できるのが、中間草案の第四章が「日本人として」であったのに対して、最終報告の第四章は「国民として」と変更され、「愛国心」が新たに盛り込まれていることである。「一 正しい愛国心をもつこと」では、次のように述べられている。

真の愛国心とは、自国の価値をいっそう高めようとする心がけであり、その努力である。自国の存在に無関心であり、その価値の向上に努めず、ましてその価値を無視しようとする者は、自国を憎むものである。われわれは正しい愛国心をもたなければならない。⁽²¹⁾

この記述は抽象的で穏当なものといってよい。「日本人」という文言にこだわっていた高坂は「愛国心」についてどのように考えていたのだろうか。

高坂は「愛国心」に対して両義的な考えを示している。「私は、愛国心や、あるいは祖国愛について、あまりに多く語られすぎることに対しては、疑問を感じるものである。しかし、それとともに、また愛国心ということに対して一種の反感をもつ

のに対しても、同じく疑問を感じ、むしろ賛成しえないものである。」⁽²²⁾ 高坂は偏った愛国心にも愛国心という言葉を忌避する立場にも反対の立場を取り、正しい意味での愛国心を捉え直そうとする。そのために提示したのが、三つの種類の愛国心である。これは高坂が自著で提出した区分であり、自身の考えとみなしてよい。

第一が「自然的愛国心」と呼ぶべきものである。言葉、衣服、食事、住まいを同じくし、同じ風土に住む者が、その風土や文化を愛するというものである。自国を愛するということは、多くの場合自然に現われることであり、とくに愛国心ということを力説する必要もない。

第二が「対抗的愛国心」ともいうべきものである。違った国や文化に接触した際、とくに顕著に現われるものである。一つの国が外国の力によって支配された際、それに対する対抗的意識が現われ、結果として目覚めてくる愛国心が「対抗的愛国心」に含まれる。

二つの愛国心はことさらに奨励しなくても起こってくるもので、むしろ行きすぎた排外的な愛国心、過激な国粋主義、すなわちショービニズム化しないことを注意する必要があるという。それに対して、第三の愛国心として高坂が提示したのが「向上的愛国心」というものである。

親が子供の生命の存在とその価値の増大を願うように、ある国民がその国家の持続とその価値の増大を願う心があると思う。そしてそれには価値の増大のための努力が伴う。⁽²³⁾

高坂は「向上的愛国心」を教育愛にもとづいて考えている。教育愛とは、現在は価値がないにもかかわらず、その価値を高めようとする、「にもかかわらず」Trotzdemの愛である。高坂は「にもかかわらずの愛」を「向上的愛国心」に結びつけてこうまとめている。

このような、にもかかわらずの愛が、私の言う向上的な愛国心であり、そして、にもかかわらずの愛であるがゆえに、それは努力を要する愛であり、そのような意味の愛は、国に対する愛を正しい形のものにする意味において、教えられてよいし、奨励されてよいと思うのである。⁽²⁴⁾

「向上的愛国心」は、誤った形のナショナリズムに結びつくことを防ぐために、ある程度導かれ教えられる必要があるものだと高坂はいう。「愛国心」の三つの区分は、最終報告において「日本人」に代えて使われた「愛国心」について高坂が敷衍したものである。先に挙げた②『私見「期待される人間像」増補版』所収の第七章「家庭・社会・国家」および「補遺 私見「期待される人間像」」のみならず、①「「期待される人間像」について」、④「「期待される人間像」について」においても、「愛国心」の三区分が説明されている。最終報告における「愛国心」の説明は踏み込んだものではなかったが、自著においては「愛国心」について詳細に説明し、「自然的愛国心」と「対抗的愛国心」がショージニズム化する危険性に注意を促したうえで「向上的愛国心」の必要を説いたのだった。

高坂は『大学の理念』において、国家を抽象的な次元のみではなく、大学が間接的に奉仕する対象として捉えていた。『大学の理念』や「私見 期待される人間像」を併せて考えてみれば、高坂が国家を考察するのは、大学が国家に直接奉仕することや過激な国家主義になることを慎重に避ける立場からであると分かる。「期待される人間像」の文言のみから高坂を国家主義的と断定することは早急だといえよう。

三．「人間像の分裂」

「期待される人間像」は文部省から与えられた題であり、高坂自身の発案によるものではない。しかし、中間草案序論の「一 人間像の分裂と第

一の要請」には高坂の考えが反映されたことが推測される。中間草案で使われた「人間像の分裂」という分析視角が、第19特別委員会がつくられる以前の1963年7月1日に刊行された『人間像の分裂とその回復』でも掲げられているからである。高坂は同書の緒言でこう述べる。

私はこの書において、現代における精神的境位の分析を試みたいと思う。それは現代の精神的境位をば三つの方向への人間像の分裂として示すであろう。しかもそれは現代の人間が、三つの方向への超越を求めることに基づくのである。それは外と、下と、上とへの超越と呼ばれるべきものであろう。それにはそれぞれに正しい根拠があると思われる。しかしその三つの方向への超越が、そのままでは三つの方向への人間の分裂に終わっている。そこに現在の精神的苦悶があるであろう。ではその分裂は回復の見込みなきものであるか。また人間性の真理は、かかる分裂の中にのみあるというべきか。ではなくして人間性の真理はやはり、その分裂の中にのみあるというべきか。ではなくして人間性の真理はやはり、その分裂の回復にあるのではないであろうか。もと真理の所在はどこに求めらるべきであるか。⁽²⁵⁾

遡ると、同書はもともと『真理の所在：人間像の分析に関する考察』（秋田屋、1947年）として出版された。1963年刊行時の表題「人間像の分裂とその回復」には、あらためて出版されるにあたって本来の内容に相応しく改められたという経緯がある。「第二章 人間像の分裂とその回復」では、横への超越、下への超越、上への超越の三つに大別された超越が哲学史を踏まえて詳述される。横への超越は、物質総じて客観的なものに権威を求めようとするもので、対象論、实在論、唯物論などを含むとされる。下への超越は、生命的なもの、

本能的なものに権威を置こうとするもので、総じて生の哲学がそれにあたる。上への超越は、キルケゴールを発端とする実存哲学における超越の意味するものとされる。高坂によると、近世における人間中心主義はヒュブリスすなわち傲慢に陥っているため、三つの方向への超越が求められているという。三つの方向の超越に開かれている人間を真の人間とするのだが、高坂の要求はそこにとどまらない。高坂はこう述べる。「しかし三つの方向への超越が求められるだけでは、人間像は三つの方向へ分裂せしめられるだけで、それは正しい人間像を与える所以ではあるまい。また単に超越が求められるだけで、何かの意味でそれが内在的とならない限り、人間の真の在り方を求めて超越がなされたとしても、そこにはただ人間に対して全くの他なるもの *das ganz Andere* が見出されたのみで、人間性そのものは忘却されてしまったと言わざるを得ないであろう。それは神なき神学と反対の人間なき人間学、人間存在なき存在論になるであろう。」⁽²⁶⁾ つまり、三つの方向に分裂してしまっただけでは真の人間になりえないと考えているのである。高坂にあって肝要なのは、あくまでも人間性であるといえよう。この章は次のように結ばれる。

私はものの問題の解決は、あくまで合理的、しかも創造的合理的であるべきを思うのである。かかる創造的合理的な知性によって、ものへの超越はものからの超越となり、ものが同時に知性の支配の下に立ち、超越的なものが、同時に内在的なものになるであろう。そしてその時に、三つの方向への超越の分裂は、充分な統一をもち得るのである。それは新たな知性の課題であると共に、新たな宗教の課題でもあるのである。そこに宗教の将来があろう。⁽²⁷⁾

1947年の時点ですでに高坂は現代の不安や苦悶を

分析し、三つの超越の方向に分裂した人間を統一することを課題としていた。分裂したものを統一するというスタンスはその後も続いており、『大学の理念』(1961)で大学教育について論じるなかでこうも述べている。「つまり一般教育とは、一方、様々に分裂した今日の知識に一般的な統一、一少なくとも概観一を与えると共に、他方、それを通じて、現代社会に有効に生活し得る均斉のとれた *well-rounded*、責任感のある人間を養成するものなのである。」⁽²⁸⁾ 中間草案の「人間像の分裂」という表現には、15年来の高坂の哲学的考察や大学論が反映されているのではないだろうか。しかし、中間草案の「人間像の分裂と第一の要請」は簡略にすぎたためか誤解や批評を招いたという。中間草案発表後に高坂が著した②『私見「期待される人間像」増補版』(1966)全八章のうち、第一章から第四章までが同箇所に関する説明であり、③「「期待される人間像」と哲学」(1966)においても、「人間像の分裂」が論じられている。『人間像の分裂とその回復』(1963)における行論と比べると、これら二つの文章にはマルクス解釈が加えられていることが特徴として指摘できる。

「人間像の分裂」という文言は最終報告で削除されたが、高坂自身の立場を示す表現として注目されるべきだろう。②『私見「期待される人間像」増補版』(1966)の「第四章 現代思想と人間像の分裂」では、現代における重要な哲学の流派としてマルクス主義の哲学、生の哲学、実存主義の哲学が挙げられている。人間像が三つの方向に分裂しているという立論は、『人間像の分裂とその回復』(1963)での行論と同様である。しかし高坂はここで新たにマックス・シェーラーにもとづき、現代の人間は「なぞめかしい」存在であると規定する。その「なぞめかしい人間存在」に対して、「人間は、そのような分裂を通じてなんらかの統一を求めようとしている」⁽²⁹⁾ ということが、今日の教育の課題だという。そして、その統一の根柢

を「愛」におきたいという。分裂した人間像を統一するという課題は高坂にあって1947年以降のものであったが、「期待される人間像」という道徳教育に関する審議を経て、新たな展開を見せたといえよう。

四．「期待される人間像」とマルクス

高坂は『来るべき時代のために―希望と反省―』（1952）においてすでに、マルクス解釈を公けにしていた。その特徴として挙げられるのが、人間疎外からの人間性の回復という点である。本論文（上）で論じたように、高坂のマルクス主義解釈は『来る時代のために』を刊行した1952年以来、疎外論的といえるものであった。それは、物のように扱われる疎外された状態から人間を解放し、本来の人間性を取り戻すという考えである。中間草案の「序論 当面する日本人の課題 ―人間像の分裂と第一の要請」にある「人間の機械化および人間の動物化の現象は、理想的人間像を喪失させ、人間性の回復を要求させるに至っている」という箇所は、本論文（上）第一章で引いたマルクス解釈の箇所と類似する。中間草案では、序論で産業技術が発達したことにより人間の機械化と呼ばれる現象が生じたことについて触れた後、本論の第三章「二 機械を支配する人となれ」では人間の機械化についてより詳しく説明されている。

また、機械化はややもすれば人間を機械の奴隷とする。しかし機械を使用し、機械に使用されない人間となることこそ必要であろう。そしてそのためには、想像力、企画力が必要なのである。創造的知性が必要なのである。

さらに物質文明はとかく人間を物質の奴隷にする。

人間は機械の奴隷であってはならないだけでなく、総じて物質の奴隷であってはならない。⁽³⁰⁾

機械化が人間性を喪失させるという発想は当時広く共有されていたと見られ⁽³¹⁾、中間草案にもそれを取り入れたと思われる。しかし、人間の物質化について触れた文章はマルクスを想起させることもあって批判も浴びたようである。中間草案後に著した③「『期待される人間像』と哲学」で高坂はこう述べている。

「人間像の中間草案」の中に人間の物品化ということばが出ていますが、これはごく一般に使われていることばであるので、一般に使われていることばを、そのまま借用してきたのです。ところがそれが非常にけしからんとか何とか言われているのですけれども、こういったような側面があるということは、現在においてもそれを認めないならば、認めないほうが学問的には非常識であると思う。⁽³²⁾

同書の序論で高坂は、中間草案においては哲学的な議論や基礎づけを省き、イデオロギーの論争に関わることもできるだけ省いたと述べている。イデオロギーに対する慎重な態度は、『来るべき時代のために』（1952）以来、高坂にあって一貫しており、本論文（上）で検討した『大学の理念―系譜と問題―』（1961）においても、イデオロギーは学問ではないという考えのもと、大学がイデオロギーの場となることを厳しく斥けた。進歩派と保守派、左翼と右翼といった政治的な色分けやイデオロギーにかかわらず、人間として当然期待される性格を描き出すことが中間草案の意図するところであった。つまり、高坂は人間の機械化や物品化という表現を、マルクスの用語としてではなく、一般的な言葉として中間草案で使ったといえる。もちろん、このことは高坂がマルクスを軽んじていることを意味しない。哲学的背景を踏まえて自身の考えを著した③「『期待される人間像』と哲学」においては、マルクスの人間像を詳細に論じている。

同書の「第三 ヘーゲル没後における哲学の潮流—特にマルクス哲学について—」では、「期待される人間像」に関連させてマルクスの思想が展開されている。教養講座の講演原稿ということもあり、中間草案で抑制していた考えが率直に述べられている。「一 ヘーゲル没後と今日の情勢との相似について」では、ヘーゲルによってそれ以前のいろいろな要素が弁証法を用いてまとめあげられ、人間像と国家像の対応関係も明らかにされたと述べている。まとまった人間像もヘーゲルによって提示されたが、1831年のヘーゲル没後より、近世は大きな分裂状態に入ると高坂は見なす。その後、1870年代から第一次世界大戦の間に新カント派的な理想主義によってまとまりがつくが、第一次世界大戦と第二次世界大戦を経て、ふたたび分裂してしまったという。現代の思想界や哲学界の分裂状態は、130年ほど前のヘーゲル没後の状態と似たものであると高坂は1960年代の時代を診断した。高坂にとって課題であったのは、人間像や思想の分裂状態をいかにしてまとめるかということであった。そのために高坂が紹介するのは、ヘーゲルに強く影響されながら、それを逆転させたと見なすキルケゴール、マルクス、ニーチェの三人である。三人、とりわけマルクスを、前世紀に今世紀を思想的に予言した人物としても紹介した。

「二 マルクスの階級的人間について」では、マルクスの人間像は階級と結びついた「階級的人間」とであると説明される。第一次世界大戦後にソビエトができ、第二次世界大戦後に中共ができたほか世界各地で国家体制の大きな変動が起こった。マルクスの予言の方向に向かったことからマルクスが一番正しい予言をしたと考える人もあるだろうと前置きしつつも、高坂が焦点を当てるのは、体制の問題よりもむしろマルクスの人間像である。

マルクスが若いころ影響を受けたのは、フォイエルバッハであった。フォイエルバッハは、精神

を根本とするヘーゲルの哲学を批判的に捉え返し人間学へと移った。高坂のヘーゲル解釈は厳しい。ヘーゲルの論理には強引で無理なところがあり、「偉いということは非常に認めるのですけれども、あまり好きではありません。まあ嫌いなんです。」と述べている。もっとも、論理の無理を賞賛している。ヘーゲルへの厳しい見方には、人間像の分裂という課題意識からマルクスを取り上げていることも背景にあらう。

『資本論』の意義を認めながらも、政治的色彩が強く、思想が硬化してしまっていると高坂は述べる。むしろ『共産党宣言』が刊行される1848年以前に書いたものの方が哲学的には含蓄が深く、とりわけNational ^{ママ}öconomie und Philosophie「国民経済学と哲学」を勧めている。これは1932年にパリで発見されたマルクスの遺稿で、『経済学・哲学草稿』の訳で知られる。マルクスの思想形成上の時期的な区分でいえば、後期にあたる『資本論』が社会構造を問題としているのに対し、初期にあたる『経済学・哲学草稿』は人間に定位したヒューマニズム的な側面が強い。高坂は「ヘーゲル法哲学批判」にある「人間に対する根は人間自身である。」を引き、radicalであること、つまり急進的であることとは、radices、根っこであることであると説明する。このように高坂はマルクスが青年期に生きた人間の問題を扱っていたことを強調している。さらに、資本主義体制下では機械制大工場における分業によって、人間が頭だけを動かす技師と手だけを動かす労働者に分裂しているというマルクスの指摘を取り上げる。第19特別委員会の主査を務めるにあたっての高坂の課題意識は、人間像の分裂をいかに統合するかというものであった。中間草案公表前後の高坂が、人間像を考えるにあたってマルクスの、とりわけ初期の著作を参考にしていたことが見て取れる。象徴的なのが、マルクス研究では焦点を当てられることのすくない、人間の愛情について述べていることである。

高坂は人間の愛情、情の本質を捉えている言葉としてマルクスを引く。

「もしあなたが人を愛しても、愛がむくもられないといったような場合には、あなたの愛は実に無力な愛である。人を愛する、しかしそれに対して反応がないようなたぐいの愛し方は、実は愛しているのではないのだ。」マルクスはそういったようなことを書いているのであります。〔中略〕実際の生活においては、そうでないことが実に多い。そこに悲劇があるわけですが、とにかく本当の愛というものは、相手の心を開いて相手の心もこっちに向かって来るような、そうしたものでなければ本当の愛ではない、とっているマルクスの気持ちには、私は愛情というものの大事な点をつかまえている点があると思う。それがあとになればなるだけ、歴史は要するに階級闘争だといい、憎しみとかそういったことばかりが強く説かれて来てしまうのです。⁽³³⁾

マルクスを引き合いに出して愛情を論じるのは、いささか唐突な印象も受ける。高坂がマルクスの愛情論に着目したことには、「期待される人間像」の第一次草案で愛を前面に押し出した原稿を作りながらも、その後の審議で愛に関する叙述を大部分取り下げなければならなかったことも背景にあるのではないだろうか⁽³⁴⁾。

「三 マルクスの革命的人間」では、マルクスの理想的人間像に関する高坂の立場が明らかにされている。マルクスの理想的人間像とは「階級をもとにした革命的人間」であると高坂は捉えるが、にわかには同意しがたいという。それはマルクスの革命論に対して異論があるからである。高坂の見方では、革命について考えたときに戦争と革命は相関関係にあるが、マルクスは一国内の経済事情によって革命が起こると考えている。しかし、

革命は単に一国内において起こるものではなく、ソビエト革命〔ロシア革命〕が第一次世界大戦後に起こり、中共の革命も第二次世界大戦と結びついているように、国際関係と結びついているという。また、革命についての研究も十分に行われていないことを高坂は指摘する。階級闘争的な革命が望ましいのか、あるいは産業革命や科学革命などによって社会を前進させるのが望ましいのかといったことを考えないまま革命を唱えることに、高坂は異を唱えているのである。

中間草案では、階級闘争や革命主義は明確に退けられている。中間草案序論の「三 民主主義の未成熟と第三の要請」では、日本においては民主主義の概念が混乱し、精神的風土に根をおろしていないことが指摘された後、こうある。「民主主義を考えるにあたって、自主的な個人の尊厳から出発して民主主義を考えようとするものと、階級闘争的な立場から出発して民主主義を考えようとするものとの対立があることである。／民主主義の史的発展を考えるならば、それが個人の法的自由を守ることから出発して、やがて大衆の経済的平等の要素を多分に含むようになった事実が指摘される。しかし民主主義の本質は、個人の自由と責任を重んじ、法的秩序を守りつつ、漸進的に大衆の幸福を樹立することにあって、法的手続きを無視し、一挙に理想境を実現しようとする革命主義でもなく、それと関連する全体主義でもない。」階級闘争的な立場や革命主義に依拠することと民主主義とは相いれないということが中間草案の立場であろう。

高坂自身、革命自体を否定しているわけではない。先にみたように、マルクスの革命論に不十分なところがあると指摘したうえで、むしろ革命の研究を進めるべきだと考えているのである。^②所収の「補遺 私見「期待される人間像」」においても、社会や国家をよくするには、経済状態や社会制度を改めるだけでは不十分で、まず人間がしっかり

しなければならないと繰り返し述べている。

社会を真によくするのは人間である。革命によって社会や国家がよくなるという場合にも、それは決して自然発生的と考えるべきものではない。適当な指導者と民衆の意思と知恵とが、よき革命を可能にしているのである。私は人間不在の歴史観には賛成できないし、人間不在でよいならすべての教育のごときはなくてもよいと思う。⁽³⁵⁾

人間不在の歴史観に反対する考えは、唯物史観への批判にみられた高坂のマルクス解釈と同一のものといっていよい。直接の言及は見られないが、「期待される人間像」作成にあたってマルクス解釈を援用したことを窺い知ることができよう。中間草案では抑制されたマルクス解釈は、草案公表後に高坂自身の考えとして展開されることとなった。マルクスを踏まえたうえでなお、経済や社会のシステムよりも人間、すなわちヒューマニズムに定位したことが高坂の特徴として挙げられよう。

五. 技術と人間性

中間草案および最終報告では、産業技術の発展に対する人間性の向上や人間が機械化される危険についての文言が盛り込まれている。高坂は技術の発展に関して、自身の考えを学術的背景に照らしてさらに展開している。

第19特別委員会の主査になる以前から、高坂は『大学の理念』（1961）で科学や技術の進歩による大学の変化について論じてきた。同書「第四章 大学の使命と大学教育」の「第三節 科学・技術的大学と一般教育」では、科学・技術に関する実用的な学問が大学において極めて大きな比重を占めるようになった結果、カントの人間理性（理論理性、実践理性、美的理性）に対して技術理性を立てて考えなければならなくなったことが論じら

れている。高坂は人間理性と技術理性の対立についてこう述べる。

文化批判が大学の一つの使命である以上、また科学・技術の偏重が人間性の否定・歪曲をもたらす危険をもつ以上、その点、十分な考慮が必要である。自然科学者自身の間から原水爆禁止の運動が起こされているのも、その意味があるであろうが、より根本的には、私の所謂人間理性と技術理性の関係が問題にされなければならない。〔中略〕問題は、人間理性を技術理性が殆んど圧倒せんとしつつあるところにある。⁽³⁶⁾

中間草案や最終報告では産業技術の発展といった文言に留まっているが、高坂が人間理性と技術理性の区分を受けて技術の問題を哲学的に考察していることは、②『私見 期待される人間像 増補版』（1966）、③「『期待される人間像』と哲学」（1966）の行論から見て取れる。そこで高坂が新たに参照しているのは、C・P・スノーの『二つの文化』The two cultures（1963）である。二つの文化とは、文科系と自然科学系の学問、文化であり、二つの文化に属する人々の人生に対する見方は、自然科学系が進歩的であるのに対して文科系は保守的であるという。この傾向は学問への態度にも見られ、自然科学系の学問では過去を捨てて新しい真理を未来に探していくのに対して、文科系の学問は過去の文化遺産の上に積み重ねていかなければならない。さらに学問の専門分化が進んだことによって、二つの文化の間に互いの理解がなくなっているという。高坂が技術の問題を突き詰めて考察する背景には、『大学の理念』（1961）でも論じられた原子力や核の力の利用に関する問題があるだろう。物理学の進歩は古い主観と客観の対立を乗り越えさせることとなった。しかし、現代物理学の先端に立つシュレディンガー、ボーア、

ハイゼンベルクは、人間の自由意志、倫理や善悪の問題を現代物理学では解くことができないことを自覚し、警鐘を鳴らしてもいた。このことを高坂は例に挙げるが、それは「科学・技術を重視するあまり、その限界を忘れてはならないことを注意しなかったからである」⁽³⁷⁾ という。高坂の見方では、物理学によって理想的人間像を作ることはできない。「期待される人間像」の中間草案の第一の要請「人間性を高めつつ、人間能力を開発せよ」にも、科学技術時代にあってそれにふさわしい人間形成を教育で行う必要があるという意図が込められている。高坂は一般教養として人文科学系に物理学を教え、自然科学系に古典的な作品を読ませるといったことを具体的な案として出した。

「期待される人間像」では触れられていないが、高坂が自著で展開しているのが科学技術の進歩に対する三つの見方である。一つ目が楽天主義的な見方で、『技術の哲学』（1926）を著したデッサウエルによる技術の定義「技術とは物質的な自然に対して、人間に自由をもたらしゆえんのものである」などに基づくものである。1959年1月のフルシチョフの講演のうちにもこの考えが示されており、資本主義社会において人間を機械の奴隷にする機械化（メカナイゼーション）から、それが徹底され自動機械化（オートメーション）の時代にまでなれば人間は機械の奴隷であることから解放され自由になるという。共産主義の技術論などもこの考えに含まれる。

二つ目が、機械主義文明に対するペシミズムである。高坂は物理学者ハイトラの言葉を引き、すべての質的なものを量的に処理しようとする自然科学的な認識が支配的になると、生命的なものをすべて物質的なものに還元しようとする危険が生じるという。オートメーションも、人間の拡張ではなく「人間の置換」に帰着する。ペシミズムを説明するにあたって、高坂の念頭にあるのは原子力の問題である。

近代産業はすぐれた動力源を見出したとともに、多くの危険な副産物を生みだしてくる。その顕著なものは、原子力利用によるものに見られる。それがすぐに大気の汚染だけに通ずるのではないが、とにかく近代産業が現代の科学技術と結びついて発達していつているところに、空気の汚染という現象が現われていることは否定できない。⁽³⁸⁾

そして三つ目の考え方が、メリオリズム、改善主義ともいうべきもので、機械や技術の利用の仕方の問題があると考ええるものである。「科学技術文明は、それをそのままに認めておきながら、それがかもしだす弊害を注意深く除去していけば、それでよい。ただ科学技術の利用において、それが人間の幸福を破壊しないようにする道徳的責任をもっているということを、科学技術者自身が十分に留意すべきである」⁽³⁹⁾ 高坂によれば、中間草案がとっている立場はこのメリオリズムである。メリオリズムとの関連で高坂は、『大学の理念』（1961）においても参照したテオドール・リットの所説を紹介している。技術的知性を生かし得る人間性の形成が教育の今日の課題であるとするリットの説は、メリオリズムと近く、今日の人間像を考える場合には無難なものだと高坂は捉える。そのうえで、メリオリズムをさらに突っこんだ立場としてハイデッガーの技術論を詳細に検討し、ハイデッガーにもっとも親近性を感ずると述べている。ハイデッガーの『科学技術時代における芸術』（1953）は、オプティミズム、ペシミズム、メリオニズムでもない独自の立場であり、その技術論を高坂は次のように解釈した。

彼は技術的人間のあり方というものが、人間の本来のあり方とつながっていることを認めているとともに、それがまた人間のなぞをより深く表わし、人間の危険をより切実に示し

ているとも考える。⁽⁴⁰⁾

高坂は『大学の理念』（1961）の段階から技術文明の進歩について考えていた。「期待される人間像」ではメリオリズムの立場が採られたが、高坂自身はその後ハイデッガーを参照することにより、人間の本来のあり方が技術とどのようにつながっているかについてさらに追及していったといえよう。

六. 欲望と道徳

中間草案および最終報告で掲げられたのが、大衆文化批判と享楽への警戒である。第19特別委員会の第1回審議会で青少年の犯罪が議論になった際、欲求や欲望の問題が取り上げられた。高坂は欲望について次のように述べている。

根本的には戦後の人間解放というものが欲望の解放という点だけになってしまう、欲望を浄化するとか制限するという面がなくなったことはあるですね（ママ）。それと天野先生からお話がありましたように、価値観が変わってきたということから、一般に価値の差別とかそういうことを無視する傾向が出て、善悪というようなこともほとんど問題にするに足らない。かてて加えていろいろなことの責任は社会の状態のよしあしとか、経済上の責任に転嫁する。⁽⁴¹⁾

草案および最終報告においては、大衆文化の消費や享楽への警戒が前面に出ているため、欲望も否定しているかのような印象を受ける。しかし、高坂は自著で人間の欲望を否定せず、むしろ道徳によってすなおに伸ばしていくことを主張する。「人間は他の人を愛するということのほうが、すなおな気持ちだろうと思う。道徳というものは、人をにくむという方向は抑えます。そして、愛するという方向を育てようとする。すべての道徳はそう

いう意味で、私たちの持っている欲望をきれいな形で伸ばしていくということに役だつようなものです。ですから中間草案の立場は、カント的とのみ簡単には言えないとともに、プラグマティズムとも簡単に言えない。」⁽⁴²⁾

高坂は欲望を自己でコントロールすることの必要を説き、幸福と快楽の区別を提示した。快楽は短い時間のはかないものであり、幸福は生涯にわたるものである。中間草案にある「幸福な人間であれ」とは、欲望を禁欲主義的にではなく自己で制御することによって得られる幸福を称揚するものである。中間草案公表後の自著で高坂は、実存主義の歴史を振り返りながら、幸福について考察した。キルケゴールの「絶望の実存主義」、ニーチェ、フランクフル、カミュ、サルトルらの「抵抗の実存主義」、ガブリエル・マルセルの「希望の実存主義」と三種類の実存主義に区分したうえで、自身が「期待される人間像」の取りまとめをした根本にあった気持ちは、希望の実存主義に通じていると回顧している。

人間は期待や希望によって支えられている存在である。自分は自分に対してなんらかの期待や希望をもち、妻は夫に、夫は妻に、また同じ一つの国に住む人は、イデオロギーを異にするにせよ、ともにその国に対してなんらかの期待や希望をもつ。もしすべての期待やすべての希望が失われた場合、その人はおそらく絶望して自殺するよりほかには道がないであろう。してみれば、現在の日本において、イデオロギーの相違、ジェネレーションの相違があるにせよ、そこにはなんらかの、期待の面において通ずる点があるだろう。たとえ共通した期待が見出されない場合にも、それに関してお互いに話し合いをする程度の何ものかを見出すことはできるかもしれない。⁽⁴³⁾

しかし、希望の実存主義というだけでは不十分で、「いかにして自己をコントロールし得る期待や希望を持ち得るか」という問題と、「いかにして国家や社会をより良きものにする、期待や希望を持ち得るか」の問題があると高坂は述べる。人間存在は、自己に対する自己からの期待のみならず、他人からの期待にも支えられた存在であると高坂は規定する。つまり自己の幸福のみを求めることは高坂にあってしりぞけられているのである。

さらに、家庭や社会や国家を考える際には、個人の幸福だけではなく、ブーバーの「われとなんじ」の関係を補わなければならないという。人間的な愛情が「われとなんじ」のつながりをつくると高坂は強調し、愛の根柢には生命の一体感があるという。愛するということを、親の子に対するものから国に対するものにまで高坂は適用する。「愛国心」に三つの区別を設けて「向上的愛国心」を称揚し、マルクスの愛情論にまで着目したのは、人間の分裂を統一するのが愛であるという考えゆえであった。

高坂によれば、道德の根本も広い意味での愛あるいは欲望にある。人間が自分自身をコントロールするという意味での道德を高坂は重くみており、過去の教えの多くは十分に傾聴されなければならないという。高坂は日本社会の一番の欠点として、社会的規範が弱く、社会的正義を守る気魄と努力に乏しい点を挙げた⁽⁴⁴⁾。

“期待される人間像”という場合に、このような、道德についても案外に変わっていない本質的な点は、それを今日にふさわしい形で生かしていくことが必要であり、それを新しい歴史および社会の場面に適合した形において、身につけさせるということが期待されるのである。⁽⁴⁵⁾

道德の内容を具体化するには、国家や社会の条件を正しく認識する、クリティカルな知性が必要で

あるという。欲望を肯定しつつも、それを制御するための道德や倫理は身につけさせるべきものと高坂は考えているのである。

おわりに

以上、『大学の理念』（1961）を刊行した後、第19特別委員会の主査を務め「期待される人間像」の作成に携わったことにより明らかになった高坂の思想の一端について論じてきた。高坂は1947年から現代の哲学と人間像が分裂していることを問題視し、それを統一する方法を模索してきた。人間存在を超越者とのかわりにおいてのみ規定する考えは、高坂にあって一貫したものであった。中間草案作成や最終報告にいたるまでの審議を通じて明瞭になったその思想は、人間像の分裂を統一するには、愛を根柢におきながら超越的なものへの関係をもつことが必要であるというものであった。

高坂が著した「私見「期待される人間像」」などのテキストでは、マルクスの人間像を詳細に検討している。また、『大学の理念』で焦点を当てた人間理性と技術理性の対立の問題を踏まえて、産業技術や機械化の問題に草案作成で取り組んだ結果、技術に対する哲学的考察も引き出されることとなった。さらに、「われなんじ」の間における愛は、高坂にあって愛国心にいたるまで適用できるものだということが分かる。

中間草案や最終報告では哲学者や思想家の説は出されず哲学史的背景も割愛されているが、本稿で検討した高坂自身のテキストでは、「期待される人間像」に対する立場がマルクスや実存主義者を挙げて明瞭に示されている。審議会や中間草案に対する世論の反応を経て、高坂の哲学的思索は深められていったといえよう。

「期待される人間像」最終報告を1966年9月に提出した後、日本でも激しい大学紛争が起り、高坂は『大学問題と学生運動』（1968）や『開か

れた大学のために』(1969)を刊行する。この間高坂の思想がどのように変遷したのか。それについては稿を改めて論じたい。

〔註〕

- (1) 高坂正顕「『期待される人間像』について」(文部省『文部時報 十一月臨時増刊号』第1072号、1966年11月所収)、26頁。
- (2) 山田真由美「『期待される人間像』(第一次草案)の成立過程—各委員による意見発表の内容を手掛かりに—」『北海道教育大学紀要(教育科学編)第72巻 第1号』2021年8月、山田真由美「『期待される人間像』(中間草案)の成立過程—主査の役割に着目して—」『北海道教育大学紀要(教育科学編)第72巻 第2号』2024年1月、山田真由美「『期待される人間像』(最終報告)の成立過程(1)—寄せられた意見に対する応答を中心に—」『北海道教育大学紀要(教育科学編)第75巻 第1号』2024年7月。審議録の要点が整理されており、本稿執筆にあたって参考にさせていただいた。
- (3) 渡辺恭彦「高坂正顕の大学論(上)—『大学の理念—系譜と問題—』(1961)を中心に—」『京都大学大学文書館研究紀要』第22号、2024年。
- (4) 文部省『文部時報 十一月臨時増刊号』第1072号、1966年11月、233頁。
- (5) 文部省調査局企画課「期待される人間像(中間草案)についての事項別意見」(貝塚茂樹監修『戦後道德教育文献資料集 第Ⅲ期 31 期待される人間像(中間草案)についての事項別意見』、日本図書センター、2004年所収)、1頁。論文については、文部省調査局企画課「期待される人間像(中間草案)に関する主要論文等意見」(貝塚茂樹監修『戦後道德教育文献資料集 第Ⅲ期 30 期待される人間像(中間草案)に関する主要論文等意見』、日本図書センター、2004年所収)。
- (6) 高坂正顕『私見 期待される人間像 増補版』(筑摩書房、1966年)をもとに作成。
- (7) 山田真由美「『期待される人間像』(第一次草案)の成立過程:各委員による意見発表の内容を手掛かりに」『北海道教育大学紀要(教育科学編)第72巻 第1号』2021年8月。
- (8) 文部省調査局企画課、『中央教育審議会第19特別委員会速記録(1~6)・(昭38.9~昭39.2)』(請求番号:平4文部00945100)、13-14頁。
- (9) 高坂前掲書、26頁。
- (10) 高坂正顕「『期待される人間像』について(主査談話)」(高坂正顕『私見 期待される人間像 増補版』(筑摩書房、1966年)所収)、230頁。
- (11) 高坂正顕「『期待される人間像』について」(『自治研究』第41巻第4号、良書普及会、1965年4月)、16頁。高坂正顕「『期待される人間像』について」(文部省『文部時報 十一月臨時増刊号』第1072号、1966年11月所収)、29頁にも同様の記述。
- (12) 文部省調査局企画課『中央教育審議会第19特別委員会速記録(17~21)・(昭39.12~昭41.1)』(請求番号:平4文部00948100)、266頁。
- (13) 同上、268-270頁。
- (14) 高坂正顕『私見 期待される人間像 増補版』(筑摩書房、1966年)、225頁。
- (15) 高坂正顕『大学の理念—系譜と問題—』(創文社、1961年)、201頁。
- (16) 緒賀正浩「森戸辰男と道德教育—占領解除後を中心に—」(道德教育学フロンティア研究会『続・道德教育はいかにあるべきか—歴史・理論・実践・展望—』ミネルヴァ書房、2022年所収)、64頁。
- (17) 高坂正顕『私見 期待される人間像 増補版』(筑摩書房、1966年)、12頁。
- (18) 同上、13頁。
- (19) 同上、14頁。
- (20) 高坂正顕「補遺 私見『期待される人間像』」(高坂正顕『私見 期待される人間像 増補版』筑摩書房、1966年所収)、185頁。
- (21) 「答申・別記」期待される人間像」(文部省『文部時報 十一月臨時増刊号』第1072号、1966年11月所収)、225頁。
- (22) 高坂正顕『私見 期待される人間像 増補版』(筑摩書房、1966年)、145頁。
- (23) 高坂正顕「補遺 私見『期待される人間像』」(高坂正顕『私見 期待される人間像 増補版』筑摩書房、1966年所収)、187頁。

- (24) 高坂正顕『私見 期待される人間像 増補版』（筑摩書房、1966年）、151頁
- (25) 高坂正顕『人間像の分裂とその回復』（理想社、1963年）、5頁、傍点原文。
- (26) 同上、51頁。
- (27) 同上、62頁。
- (28) 高坂正顕『大学の理念―系譜と問題―』（創文社、1961年）、169頁。
- (29) 高坂正顕『私見 期待される人間像 増補版』（筑摩書房、1966年）、79-80頁。
- (30) 「『期待される人間像』中間草案全文」（高坂正顕『私見 期待される人間像 増補版』筑摩書房、1966年所収）、220頁。
- (31) F. パッペンハイム著・栗田賢三訳『近代人の疎外』（岩波書店同時代ライブラリー、1995年、初版1960年）。原著はFritz Pappenheim, *The Alienation of Modern Man: An interpretation Based on Marx and Tönnies*, Monthlz Review Press, 1959.
- (32) 高坂正顕「『期待される人間像』と哲学」（国立教育会館編集『教養講座シリーズ1』帝国地方行政学会、1966年所収）、32頁。
- (33) 同上、33-34頁。
- (34) 山田真由美「『期待される人間像』（第一次草案）の成立過程：各委員による意見発表の内容を手掛かりに」『北海道教育大学紀要（教育科学編）第72巻 第1号』2021年8月、93頁。
- (35) 高坂正顕「補遺 私見『期待される人間像』（高坂正顕『私見『期待される人間像』増補版』（筑摩書房、1966年）所収）、180頁。
- (36) 高坂正顕『大学の理念―系譜と問題―』（創文社、1961年）、164頁。
- (37) 高坂正顕『私見 期待される人間像 増補版』（筑摩書房、1966年）、49頁。
- (38) 高坂前掲書、33頁。
- (39) 同上、34頁。
- (40) 同上、40頁。
- (41) 文部省調査局企画課、『中央教育審議会第19特別委員会速記録（1～6）・（昭38.9～昭39.2）』（請求番号：平4文部00945100）、35-36頁。
- (42) 高坂正顕「『期待される人間像』と哲学」（国立教育会館編集『教養講座シリーズ1』帝国地方行政学会、1966年所収）、81頁。
- (43) 高坂正顕『私見 期待される人間像 増補版』（筑摩書房、1966年）、92頁。
- (44) 高坂正顕「補遺 私見『期待される人間像』（高坂正顕『私見 期待される人間像 増補版』筑摩書房、1966年所収）、189頁。
- (45) 高坂正顕『私見 期待される人間像 増補版』（筑摩書房、1966年）、121頁。